

2 日目

8 月 13 日 (火)

本日も暑い一日。昨日に引き続き 180 名の参加で教室が続けられた。

### 1 時間目 野間敏克先生講義「高校教科書で教える〈農業問題〉」

基本的内容は大阪での講義と同じなので、大阪での記録を参照してください。

質疑

1 農業振興政策が本当にできるのか？

答え 例えば、商社の活動を調べさせると可能性が見えるのでは。

2 雇われている人間のなかに外国人は入っているか？

答え 不明である。後日明らかにしたい。

3 農地の税制はどうあるべきと考えるか？

答え 放棄地はもっと高くすべき。土地の流動化ができるような制度にすべき。

4 北海道で T P P の授業をやったがなかなかうまくゆかないがアドバイスを。

答え そこまでできれば上出来である。北海道こそ農業の可能性が一番大きいところである。

### 2 時間目 宮崎三喜男先生＋西村周三先生「経済の授業をエコノミストと作る〈幸福のための社会保障制度〉」

宮崎先生の授業提案



提案する宮崎先生

まず、学校の様子を紹介。現在国際高校。前任校はチャレンジスクール。

導入：クイズからはじめる。

1 年金はいつから給付 20 歳からも給付あり。意外な知識。

2 3 割負担の知識 これは結構知っている。

3 将来受け取る年金金額はどうなるか 賦課方式と物価変動の関係で、わからないというのが正解。

4 心臓手術で 100 万円、いくら負担？ 100 万円の手術でも 9 万円で済む場合がある。高額医療費制度がある。

そのうえで、あなたが望む社会保障制度とは？を聞き、座標にシールを張らせる。

そこから、実際の日本はどう？と畳み込む。

日本の税金や社会保障料は高い？低い？と問いながら、データを示し考えさせる。それは、二項対立ではなく、途中の存在がありではないかという問題意識からである。

展開：ここからが本論になる。

社会保障制度の意味（もし社会保障制度がなかったら？）を考えさせえる。その際、コスト、ベネフィット、見える部分と見えない部分を明確にしておくといよい。見えない部分は「安心」なのではないかとまとめる。

社会保障制度を整理する。社会保障料で運営される。税金で補助している。なぜこれをするのか？ 社会保険とそれ以外の部分の仕組みは違うことを認識させたい。

年金は保険である。保険はみんなで支え合うものである。払い込んだお金分返って来ないのは「そんな」という考え方を修正しなければいけない。年金保険は高齢化、長寿のリスクへの対応である。

この理解を踏まえて、社会保障制度の仕組みの図を生徒に紹介して、考えさせる。ここが、生徒に考えさせたかったみそである。しかし、生徒には十分伝えきれなかった。

家計、市場、政府のどこで福祉ニーズを満たしているのかをこの図で考えさせたかった。

福祉は風船のようなもの。どこかが膨らむとどこかがへこむことも伝える。

福祉ニーズへの対応には、次の三つのパターンがある。

家族依存型 日本、アジア、カトリック諸国

政府依存型 スウェーデンなど

市場依存型 アメリカ である。ここからどの型を日本は選んでゆくか。社会全体で高齢者をどう支えてゆくかを考えさせることがよいのではないか。

#### 西村周三先生のコメント



コメントする西村先生

宮崎実践は国にだまされているのではないかという批判を、ネットワークの部会で受けたと、きいた。私は、今は人口問題研究所にいるが、中立的だと思っている。エコノミストとして正しいことを言っているつもり。問題はマスコミだろう。何十年も先の将来はわからないことが多い。しかしわからないというとニュースにならない。教育でも同じ。わ

からないことはわからないというべき。私はそうしてきた。宮崎実践で、年金の受取金額はいくら？という問の答えで、わからないといったのはすばらしい。しかし不満もある。ひとりひとりが考えるべきという箇所である。それができないから制度設計をしっかりとするのである。私だって、専門で医療や福祉をテーマにしてきたが、議論してだんだんわかることも多い。

考える資料として『厚生労働白書の24年度版』はとてもよいと思う。ここにかんがりの部分が宮崎実践に入っているデータや考え方が示されている。

年金に関しては、積み立て方式か、賦課方式かの対立がある。経済学者は自己責任を強調して、たいてい積み立て方式になる。宮崎実践では支え合いを目的としているが、賦課方式にならない。それは、背後にある人口問題の考え方が重要だからだ。

高齢化のなかで65歳以上ではなく75歳以上を支えればよいように設計をし直す必要がある。高校の出張授業でその話をしたら、これは問題の先送りではないかという高校生の疑問がでた。鋭い質問だが、先送りではないと私は思う。なぜなら、実は、高齢化と賦課の問題より世帯、家族問題の方が重要だからだ。

宮崎実践にあったように、年金が将来、いくらもらえるかを議論する意味はあまり意味がない。むしろ世帯構成の違いによる影響などを議論すべきである。子どものいる世帯はなんとかなるからだ。しかし、こどものない高齢者は誰が支えるのか。もちろんいまや過去のように、家族が扶養することを標準的に考えることはできない。

次に、世代間分配の不公平という議論はそれでよいかどうか？なぜなら、負担と受益の比較だけでは、大事な論点を落とすからだ。過去について言うと、経済成長があったから現在の高齢者は「とく」ができています。今後の年金の制度がどこまで持つかを厚労省も計算しているがマイナス成長を想定していない。3%成長だとなんとか維持できる。でもそんな成長が可能かどうか。

対応として、マイナス成長になった場合に高齢者の年金を下げるができるかが、政治的な決定となる。貧しいながらどうみんなで支えるかが問われる時代になるのだ。しかし、市場主義者は連帯がみえない。ただし、どれだけもらえるか分からないとしても、払った人間が払わない人より多く受け取るというのは変わらない原理であろう。

また、年金を民間だけで対応するというのも限界がある。世代間格差の論議では、二つの議論の混同がある。今の問題と将来の制度設計の問題が混同されている。若い人への社会保障が弱いのは事実。でも、これからもっと深刻になるのは、大都市部での一人暮らしの人間をどうするかという問題である。おせっかいの人間がいなくなっている。そのおせっかいに相当する連帯や支え合いをいかにつくるかが課題である。

## 質疑

1 生徒の実態をみると生活保護の場合をどう考えるべきかと悩む。

答え（西村）：窓口で外国人が生活保護を申請する様子を見たが、たしかに問題はある。そ

の前提としてはそれらのひとを私たちがどう扱ってきたかを考えるべき。とはいえ国を閉じるような政策はだめ。

(宮崎)：社会保障費はGDPの3割、四つの柱を同じに扱ってきたが、年金とその他をわけて考えさせたい。そこがポイントだと思う。

## 2 行動経済学と社会保障の関係は？

答え(西村)：行動経済学は伝統経済学に反省を迫る要素がある。社会保障の問題を考えるときには経済的な合理性だけでない要素が重要。連帯感などは現代経済学からはなかなかでてこない。ただし経済学の基本は大事。それは確認したい。

### 第3時間目 大竹文雄先生講演「行動経済学を授業にいかす」



講義をする大竹先生

授業に生かすというより日常生活や生徒理解に生かすとよいと思う。

伝統的経済学の間人像は、ホモエコノミクスである。伝統的経済学の発想には反発をする人も多いかもかもしれないが、これは、情報を完全に利用しなかったり、計算能力がなかったりした人の行動は、市場の裁定行動で打ち消されてしまうというのが前提で、すべての人間が利己的、合理的であるということを行っているのではない。

しかし、それでは上手く行かないこともある。ホモエコノミクスで説明できない例も結構ある。例えば、多重債務に陥ってしまう人が発生して社会問題となるのはなぜか。デフレの問題なども同じ。それほど深刻なデフレでないのに長期化や深刻化するメカニズムは次のように説明できる。すなわち、物価上昇率5%のもとで3%の賃金の上昇と、物価上昇率0のときに賃金が1%上昇するのとどちらがよいかという問題と同じで、多くの人は前者を選ぶが、これは合理的な決定ではない。ここからも人間は、経済学が想定しているほど合理的でない面をもっていることがわかる。

行動経済学では、現実の人間行動を前提にした経済学を組み立てる。それは、バイアス、直感による意思決定、時間非整合、などである。研究手法として、アンケート、実験室実験、フィールド実験などがある。現在では、行動経済学の知見や方法は、主流派経済学のなかにも組み込まれている。

いくつかの例をあげていきたい。

まず、有名な、1万円を見ず知らずの二人で分けるという最後通牒ゲームの例がある。分け方を提案する人と、その提案を受け入れるかどうか判断する人が別々にいて、お互い話し合いはできない。提案者の提案を、受け入れ側の人を受け入れれば、その額が分けられるが、受け入れ側が提案を拒否すると、ふたりとも、一円ももらえないというゲームだ。この場合、ふたりとも合理的な人間なら、相手に1円、自分が9999円と提案者は提案するはずだ。ところが、今会場でお聞きした人は、5000円ずつ分けるという。このように、人間は利己的で計算高いというわけではないということがわかる。

限られた時間で直感的に判断するヒューリスティックスの事例では、たとえば、バットとボールが合わせて110円。バットはボールより100円高い。ボールの値段はいくら？ という計算問題を直感でやると、間違えるのと同じである。

金利計算などもそれと同じで、直感が邪魔をしたり、異時間選択で時間の非整合がでるのが特徴である。金利の例と同じ問題は、ダイエットの意思決定の例（あしたからはじめ、翌日になるとまたあすからにする）である。

先生方と関係する問題では、夏休みの宿題をいつやるかという問題がある。はじめにやるとか計画的にやったというのは3割程度で、7割程度夏休みの最後にやっている。夏休みの前には、宿題は夏休みの最初にやるとか、均等にやると計画していた人がほとんどなのに、その計画は実行できない。

リスクに対する態度なども同じである。微小な確率でしか発生しないことを過大に認識することがわかっている。利得よりも損失は2.5倍くらい、悲しさや悔しさは大きく感じる（損失回避）。それをまとめたのが、プロスペクト理論のグラフである。株式の心理はこれで説明できる。ギャンブルの場合も同じである。損切ができない。

人の目の意識の実験も面白い。人の目があると人間は正直になるという実験結果がカーネマンの本では紹介されている。

また、デフォルト（初期設定）の影響が大きいことが分かっている。つまり、人間は、初期設定以外のものを選ぶことは少ない。この点は、伝統的な経済学では見落とされた点である。

行動経済学を授業に生かす例をあげておく。

シカゴの学校で、テストの時にどんな誘因を与えたら生徒が頑張るかを見る実験が行われた。方法は、予め報酬を与えておいて、テストの点数が下がったらそれを没収する方式か、点数が上がったら報酬をもらえる方式のどちらかという形で調べている。結果は、先にご褒美を与えて後で、テストの点が悪ければそれを没収するという方式が一番大きな成果が上がった。報酬を後でもらうというのは、効果が少し弱く、まして、一ヵ月後に与えるのはほとんど効果なしという実験結果だった。

この実験結果からわかることは、教員が、この勉強をすると10年後こんな良いことがありますよといくら力説しても全く意味がないことがわかる。今すぐに、どのような効果が

あるか、ということ強調して、生徒に興味やインセンティブを与えることが大事なのだ。

不正行為を減らすヒントも行動経済学が与えている。アエリーの不正行為に関する実験である。得点をごまかす状況で、どこまで人間はずる、ごまかしをするかというものである。うそをつくのがどのくらいいるか？ということでもある。結果は、人はあまり「ずる」はやらない、でもちょっとだけ「うそ」をつくという知見が得られている。その際、さきに不正行為をしないという署名をすると不正行為が減ることがわかっている。

人々がデフォルトに影響されるということは、行動経済学でよく知られている。最も有名なのは、ドナーカードで同意の人が多い国と少ない国の差の存在である。ドイツとオーストリアでは、オーストリアの方が圧倒的に同意が多い。それは、ドナーカードで拒否していないと自動的にドナーに登録する制度になっているオーストリアと、同意がないとドナー登録がなされないドイツの、初期設定の違いからくる。私たちは面倒なことは嫌いだし、現状維持バイアスがある。しかも、既にあるものを失うことは悲しい。そのため、チェックしてあるものはずすのは大変なのである。デフォルト設定が有効な場合は、あまり経験しないこと、判断が難しいこと、その選択による結果がすぐに分からないことである。

デフォルト設定が、人々の意思決定に大きな影響を与える例として確定拠出型年金制度 401K が知られている。労働者にとって有利な仕組みだが、コストとベネフィットの間に時間差があり、問題そのものが難しいという特徴がある。

デフォルトと類似のケースに、誘導方式による参加率向上がある。例えば、インフルエンザの予防接種の案内に日時まで記入させる方式の案内の方が、日時だけを知らせる案内よりも、接種率が向上することが分かっている。

最後に、時間割引の問題をもう一度したい。金融というのは、まさに時間割引の問題だ。借りる場合、貸す場合というのは、借りた時点と返す時点の時間差、貸した時点と返してもらう時点で時間差が存在するものだ。肥満という問題も同じ。食べた時点と太る時点で時間差が存在する。伝統経済学は、太っている人間は、今食べる喜びと、将来太るリスクを合理的に計算して、太ってもいいと判断したから太っているのだと考える。行動経済学は、食べ過ぎると太ると分かっている、それはいやだと、分かっているけれど、食べることを止められないと考える。こういう現在のことを強く考えすぎる人は、現在バイアスが強いという。こういうタイプの人には、一旦決めたことを強制的にやらざるを得ない仕組みを作れば、後悔することが減るだろう。

カーネマンの本（『ファスト&スロー』）のなかで 17 章 平均への回避の箇所は有用である。ぜひ読んで欲しい。そのなかに、ほめたほうが能力が上がるか、叱るほうが能力が上がるかという問題がある。答えは、ほめるほうがよいというのが、心理学の研究で知られている。しかし、現場の人は、叱った方が効果があると思っていることが多い。叱って能力が上がると思うのは、単にテストの点はその人の能力を示す平均的な点に戻っていく傾向（平均への回帰）という統計的性質を因果関係と錯覚してしまうからだ。失敗したらた

いてい次は、もとの水準に戻っているだけで、失敗するのが偶然なら、もとの水準に戻るのも偶然に過ぎなくて、その人の努力とは無関係な結果なのだ。

最後に宣伝。「オイコノミア」というNHK教育(Eテレ(火曜日夜11:30~55))の番組がある。経済学を分かりやすく伝えているので、見てもらえると有難い。

#### 質問

1 年金と行動経済学との関係は？

答え ダイエットと同じで人間は将来のことを考えても行動できない。だから強制貯蓄としての年金があると理解して欲しい。

#### 4 時間目 野間敏克先生講義「歴史を経済の観点から読み解く<世界恐慌>」

基本はこれまでと同じなので、大阪、福岡の記録を参照してください。



講義する野間先生

#### 質疑

1 ケインズとニューディールの評価が私たちが習ったときと違うが？

答え 最近の成果を紹介している。ケインズ理論はニューディールとは直接関係がないこと、ニューディールは総需要政策としては成功しているわけではないことを確認したい。

2 世界恐慌のきっかけは本当はなんだったのか？

答え 複数の要因であるが、経済学者の議論も多様で最終的には決まっていなしいし、現在の政策の評価とも絡むホットな問題である。

3 歴史と経済を一体のものとしてとらえる見方は、これからの学習指導要領などに反映されるのだろうか？

答え(新井) 私見では、政経で教えるより、世界史でこの部分をしっかり経済を踏まえて教えた方がよいと思う。

以上、二日間、暑さを吹き飛ばすように教室が行われた。なお、一日目の写真がないのは、記録者がカメラを忘れたためであることを付け加えておく。 記録と文責 新井